

1890-12-20-1973-1-26

国士館創立者

柴田**徳**次郎

生誕120周年

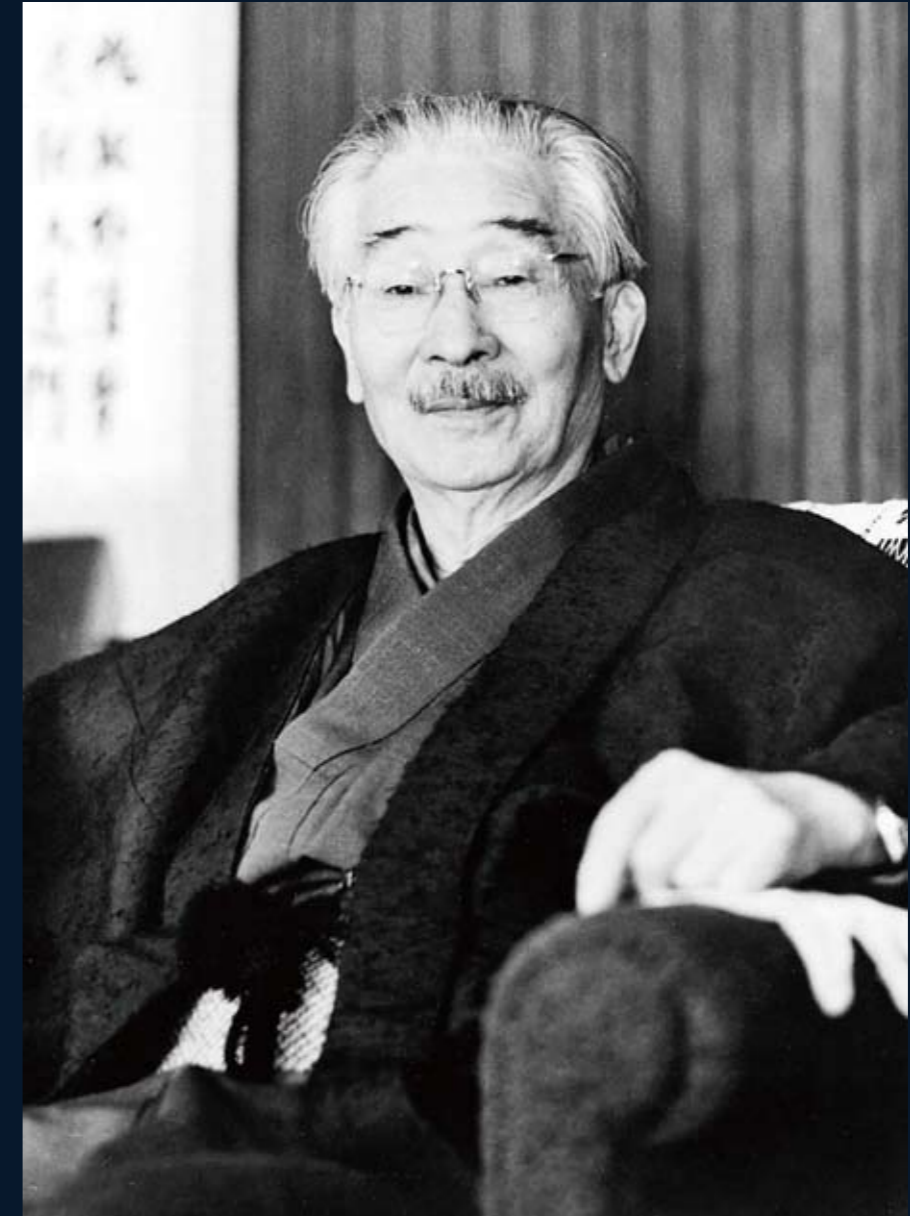
教育者 柴田徳次郎の生涯





柴田徳次郎筆「誠意・勤労・見識・気魄」（右より）

柴田徳次郎が、自著『国士館と教育』（大正15年）に「国士館の主義」として掲げた四徳目。国士館教育の指標として寄附行為や学則にも謳われてきた。



創立者 柴田徳次郎の生涯

1890.12.20 - 1973.1.26

1890（明治23）年12月20日、福岡県に生まれる。弱冠14歳で上京し、牛乳配達など苦学の末に早稲田大学専門部を卒業。在学時より同郷の頭山満、野田卯太郎、中野正剛らの知遇を得た。1917（大正6）年11月、26歳で同志とともに国士館を創立した。

国士館を法人化するとともに、中学校・商業学校・専門学校を設立、多くの青少年に教育の門戸を開き、文武両道の精神を基本とする人材の育成に努める。戦災で校舎を失う苦難を乗り越え、国士館の再建復興をはかり、中学・高校・大学・大学院を一貫する学校法人国士館の基礎を築いた。

1973（昭和48）年逝去、享年83歳。教育にすべてを捧げた柴田徳次郎の志は、今も国士館に脈々と受け継がれている。正四位勲二等瑞宝章。経済学博士。



国士館の創立と青年大民団

早稲田大学の学生であった柴田徳次郎は、
1913(大正2)年、同志とともに青年に自覚を促す文教活動をねらいとする
社会啓蒙団体「青年大民団」を結成した。
青年大民団は、著名な学者文化人を講師に招き講演会を開催する一方、
1916(大正5)年に機関誌『大民』を創刊、
柴田は編集主幹として藩閥政治打破や普通選挙運動などの言論活動を展開する。
その活動の中から、新たな高等教育機関を設立しようとする有志が集まり、
1917(大正6)年11月4日、
「真智識者」たる「国土」の養成を目的として、
東京麻布区筈町(現港区南青山)の民家の一隅に私塾「国士館」を創立した。



宣言

活学を講ず

物質文明の弊日に甚だしく人は唯だ科學智を重んじて徳性の
涵養を知る。今日に於て教育とは唯だ科學智の賣買たるのみ、
科學智の必要は本より言ふを待たざれども此の如きは唯だ物質
文明に終る、精神文明なくして國家豈に一日の安きを得んや、
蓋し精神文明は物質文明を統一指導するものなり、精巧の武器
萬種羅列するも、兵士起つて之を運用するに非れば、戰場に何
等の効果なからん、吾人は精神文明と精神教育とを此際に唱道
して國家の柱石たるべき真智識を養成せん事を期す。

文化僻陲に及ぶの今日、辛爾として此の如きの言を聞かば、
或は吾人を以て迂となす者あらん、然れど、今日の日本文化は
猿真似の文化なり、悉く之れ西洋直譯の文化なり、其の表面を
摸倣せるものなり、其の弊害を識別する處なくして凡て唯だ舶
來品を宗と仰ぐの文化なり。

1917(大正6)年11月 宣言「活学を講ず」(『大民』大正6年11月号)

巻頭に掲げられたこの文章は、「国士館設立趣旨」として、新たな教育機関の創立を世に訴える宣言文ともなった。



「是れ活学の大道場」

創立期の教育理念を記す文書に

「**国士館の本義**」(『大民』大正8年10月号)がある。

1919(大正8)年、国士館は、教場を麻布区筈町から
世田谷の松陰神社隣接地に移し、講堂を新設した。

これを記念する『大民』特集号に掲載されたのが「**国士館の本義**」である。

その中の一節「**是れ活学の大道場**」に、

「**国家の柱石たるべき真智識者を養成**」するため

「**活学を講じて活人を作る**」という言葉がおさめられている。

「**活学**」「**活人**」は、**学んだ知識や技能を実践に活かすこと**、

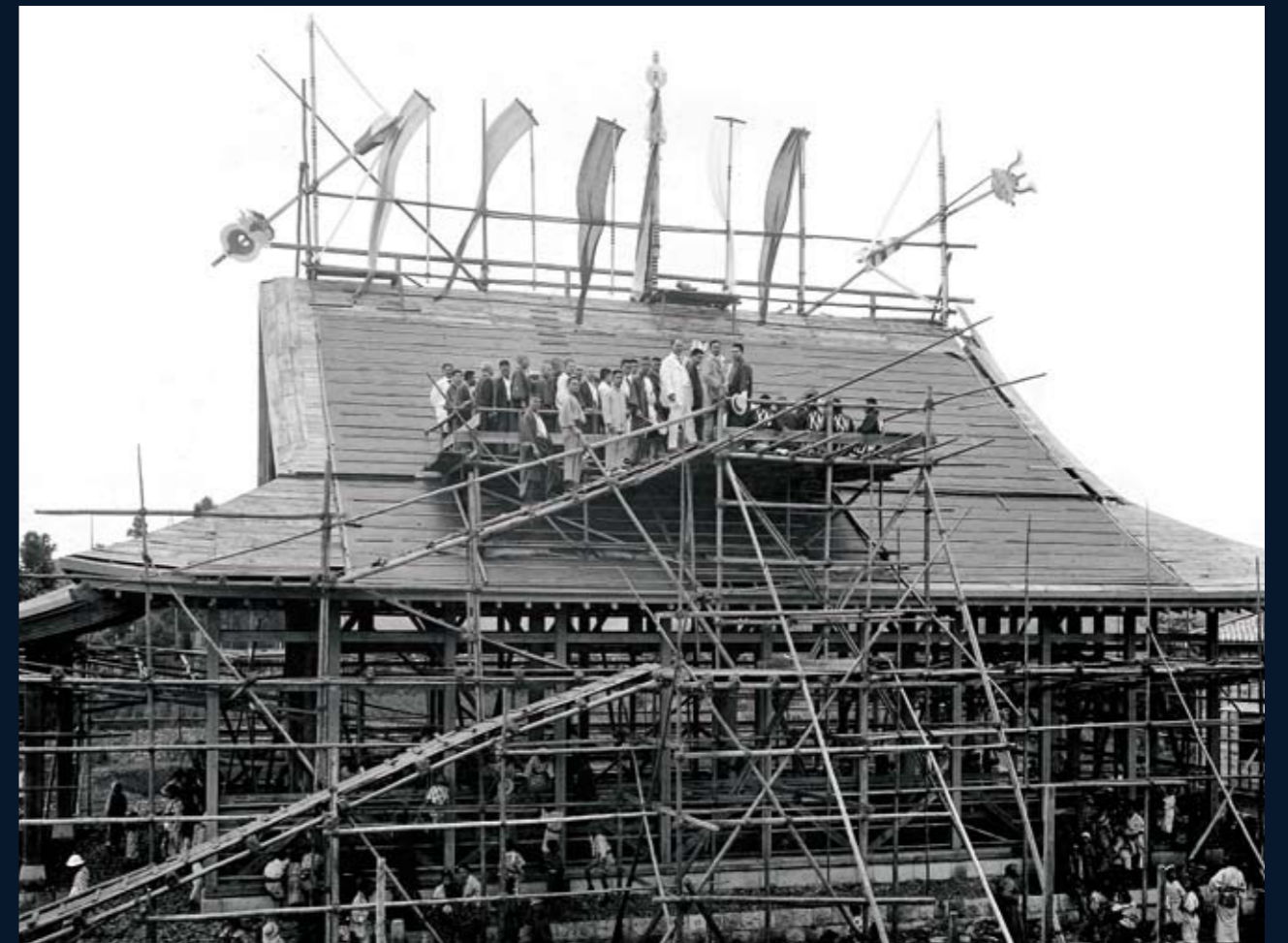
またそれを修得した人物を意味する。

まさに「**活学の大道場**」を創ることが国士館の理想だった。

「**活学**」の語は、明治・大正期の教育者の論説に用例が見られるが、

これを教育の現場に応用したことが、

国士館の創造性であった。



1919(大正8)年7月 大講堂上棟式

「大正の松陰塾」たらんとした国士館は、松陰神社の隣接地に、大講堂、柔剣道場、寄宿舎などを建設した。



1921(大正10)年頃 大講堂での阿部秀助講義

学生は、教場となった大講堂で、当時の高名な学者たちにより政治、経済、哲学、外国語などを学んだ。



法人化と諸学校の設置

1919（大正8）年、国士館は、世田谷への校地移転とともに、経営基盤確立のため財団法人化を推し進めた。

法人は柴田徳次郎と小村欣一（侯爵、外相小村寿太郎長男）を設立者に、顧問に頭山満、野田卯太郎（通信相）、田尻稻次郎（東京市長）が名を連ね、設立目的に「国士たる人材の養成」を掲げた。

1921（大正10）年には国士館維持委員会を設置し、栗野慎一郎、渋沢栄一、徳富蘇峰ら文教政財界の名士の支援を得て、私立学校としての基礎を固めた。

まず、高等部・中等部を開設し、次いで法令に準拠して、1925（大正14）年に中学校を設置、翌年には勤労青年のための商業学校を、さらに1929（昭和4）年に教員養成を目的とする専門学校を設置する。館長となった柴田は、『国士館と教育』（大正15年）を著し、「誠意・勤労・見識・気魄」の四徳目を教育の理念に掲げ、学風の確立を図った。



1926（大正15）年 国士館維持委員会の支援
維持委員会には、国士館の教育に賛同する各界の名士が参集し、財団運営への支援が図られた。
（前列左より頭山満、野田卯太郎、渋沢栄一、徳富蘇峰、後列左より花田半助、渡辺海旭、柴田徳次郎）



1930（昭和5）年 建設中の専門学校校舎
諸学校の設置にあわせて、校舎の新設と拡充が順次進められ、教育の環境が整えられた。



「文武両道」の教育理念

国士館は創立以来、一貫して「文武両道」の学風を掲げてきた。

これは国士館の創立母体となった青年大民団が、

「心身の修練」と「智徳の精進」を結社の規約に掲げ、

人格形成の目標としたことに淵源がある。

以来、国士館は「高邁なる志操を持する」人格の形成を教育の目標としてきた。

このため、創設時より中学校や専門学校の教育課程に、

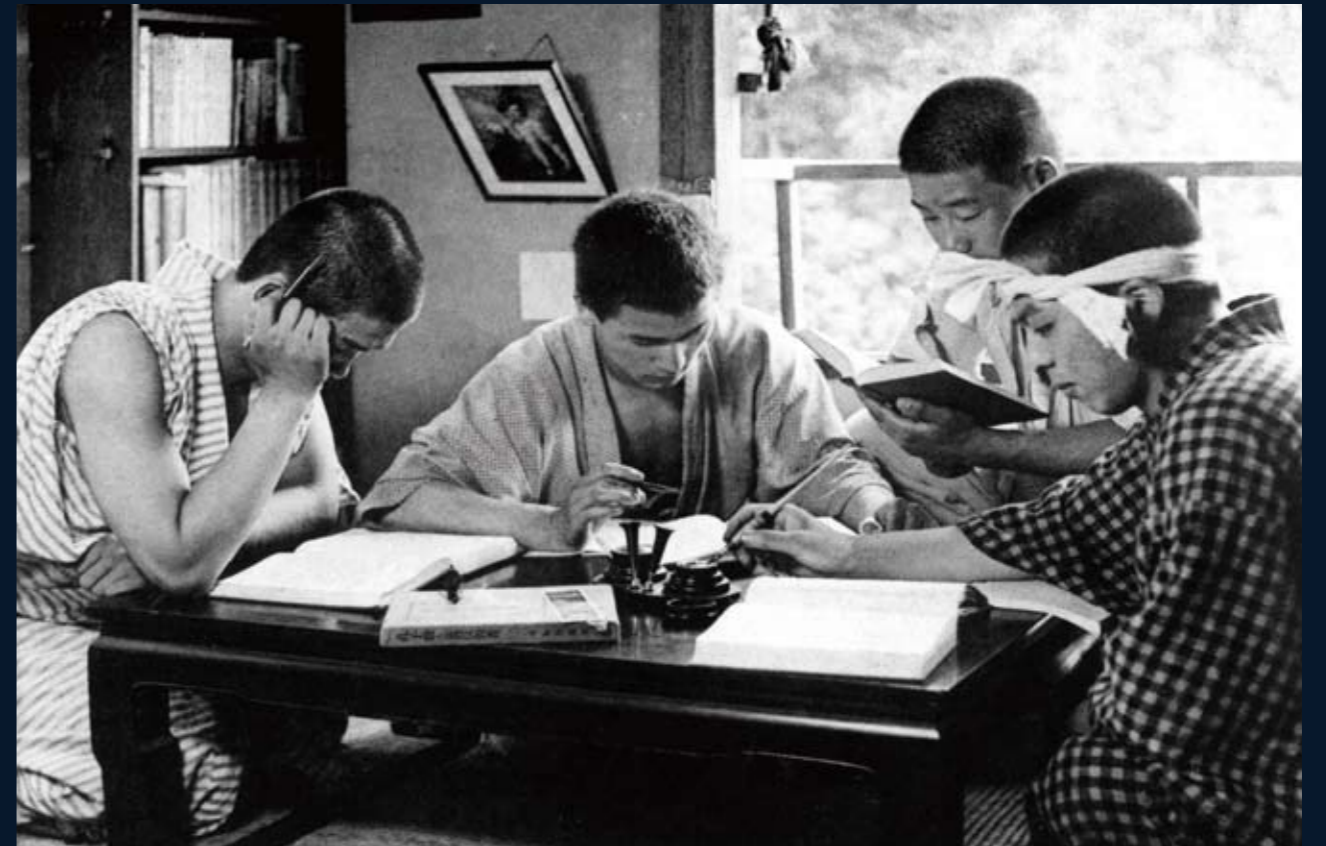
剣道・柔道・弓道などの武道教科が採り入れられ、

人づくりと教員養成の柱として大きな役割を果たしてきた。

この伝統は、戦後にも継承され、

中学・高校・大学を貫く国士館スポーツ教育のうえで、

他学にはない学風を築き、輝かしい成果を挙げてきた。



1938 (昭和13) 年頃 全寮制の学生生活

専門学校の学生は、朝夕の武道稽古と勉学に励み、寮での共同生活を通じて、人格の形成を図った。



1942 (昭和17) 年頃 武道教育

剣道・柔道・弓道のひとつを必修とする教育課程から、武道教育の指導者を多数輩出した。



海外への視座と戦時教育

国士館専門学校の設置で、教育の組織と環境を整えた国士館は、1930（昭和5）年、時代の要請に応え、高等拓植学校を設置し、校長上塚司のもとでブラジルのアマゾン開拓に着手した。また1932（昭和7）年には、満蒙開発を目指す人材養成を目的に鏡泊学園を設置、海外雄飛を志す青年らの教育にあたった。そのねらいは、その後、多くの困難に逢着した。1941（昭和16）年以降、学園では修業年限の短縮、報国隊の結成、軍事教練の拡大、勤労働員の実施など、戦時色が濃厚になるなかで、多くの学生が大講堂に別れを告げ、戦地へ赴いた。



1942（昭和17）年7月 軍事教練

戦争の影響は、学内外で行われる軍事教練の拡大ほか、繰上卒業や制服の国民服への変更などにも及んだ。



1943（昭和18）年12月頃 学徒出陣

戦争の長期化にともない、学徒出陣のほか、軍需工場への学徒動員も行われ、次第に学問の場が奪われた。



戦災復興と大学の創設

敗戦の傷跡は、国士館に深く残った。

1945（昭和20）年の東京大空襲の戦火で、校舎の大半が焼失し、

校名は「国士館」から「至徳学園」へ改称を余儀なくされた。

さらに、国士館教育の根幹であった武道教育も、

占領政策を受けた文部省指令により排除され、

国士館は大きな打撃を受け、深刻な危機に直面した。

しかし、1951（昭和26）年、講和条約が締結され占領が終わると、

有志による再建活動が始まり、

1952（昭和27）年に「国士館再興会議」が発足、

同年「国士館大学維持委員会」が組織された。

1953（昭和28）年には、復興の第一歩として国文科と経済科を擁する

国士館短期大学が創設され、

次いで1958（昭和33）年、創立時からの宿願であった国士館大学が創設されると、

体育学部をはじめとする学部教育組織の整備が一気に進んだ。



1952（昭和27）年頃 国士館再興会議

国士館の復興を支えた各界の名士の手で「国士館再建趣意書」が策定され、法人経営の再建が図られた。
(左手前より安川第五郎、木村篤太郎、有田八郎、森田久、緒方竹虎、松野鶴平、出光佐三、1人おいて古野伊之助、石井光次郎、右奥に柴田徳次郎)



1963（昭和38）年7月 賑わうキャンパス

伝統の武道教育が復活し、大学創設により学生も急増した。特に女子学生の増加が学園を華やかにした。



「言道」教育と争友組

柴田徳次郎は、国士館教育の再建にあたって「言道」という個性的教育を推進した。

「古来識者は民衆に説き、

民衆は只聞^{ただ}くのみであったが、

所謂民主主義を大成するには、各人が自らの意見を表現し、

互に切磋琢磨しなければならない」とし、

「理智の透徹に依って人生の真理を探求し、

体得した真理を広く隣人に伝え、世論に訴え、

活用すること」(年不詳草稿)が

「言道」教育のねらいであると述べている。

また「言道」を単に弁論術とすることを強く戒め、

『論語』の「徳あれば必ず言有り、言有るは必ずしも徳有らず」(憲問篇)を引用し、

「言道」は「徳」を体得し実践する修養法であると論じた。

同じ頃、学友が互いに諍^{いさ}め合う組織として推奨した「争友組」にも、

共通する柴田精神が流れている。



1965 (昭和40) 年1月 言道部の活動

言道部は、自己の信念表明が真の「国士」を育むという信条のもと、他学との交流を盛んに行った。



1965 (昭和40) 年4月 館長訓話

必修科目「実践倫理」の一環として、毎週「館長訓話」の時間が設けられ、館長柴田自ら講義を担当した。



総合大学への発展

国士館は、その後、政経、工、法、文学部を次々に開設し、
中学・高校・大学・大学院を擁する総合大学へと発展を遂げた。
柴田徳次郎は、学生・生徒が急増しても必ず自ら訓話を行い、
卒業面接を実施するなど、常に学生・生徒に直接接して教育に心血を注ぎ続けたが、
1973（昭和48）年1月26日、すべてを教育に捧げ尽くした83年の波瀾の生涯を閉じた。
その後、国士館は時代の変化に応じ、
学園の近代化と諸改革を推し進め、情報化やグローバル化など、
社会が大きく変容する時代にあっても、
柴田徳次郎の遺した教育の伝統を引き継ぎ発展してきた。
今や国士館を巣立った卒業生は15万人に上り、
教育者 柴田徳次郎の志を受け継ぎ広く各界で活躍している。



1967（昭和42）年2月 館長の「卒業面接」
全学生が館長の担当する「卒業面接」を受け、国士館で修得した智識を確認し、社会へ巣立って行った。



1965（昭和40）年9月 総合大学への発展
体育学部・政経学部・工学部に続き、法学部・文学部の設置で、国士館は総合大学へと飛躍を遂げた。
（左より稲垣敏夫、立元与四郎、安高武、阿部秀夫、柴田徳次郎、柴田梵天、藤井秀夫、岸田秀雄）



創立者 柴田徳次郎 略年譜

1890.12.20-1973.1.26

西 暦	和 暦	略 年 譜	国士館の沿革
1890	明治23	福岡県那珂郡別所村(現筑紫郡那珂川町別所)に誕生	
1905	38	実兄高木波次郎を頼り上京	
1912	大正 元	早稲田大学専門部へ入学	
1913	2	青年大民団結成	麻布区筈町(現港区南青山)に青年大民団が発足
1915	4	早稲田大学専門部を卒業、中国大連へ渡航	
1916	5	雑誌『大民』の主幹に就任、「此木田頑石」などの名で執筆	青年大民団、機関誌『大民』を創刊
1917	6	国士館館長に就任	麻布区筈町に、私塾「国士館」を創立
1919	8	財団法人国士館理事に就任	財団法人国士館を設立(設立者柴田徳次郎・小村欣一) 世田谷松陰神社隣接地(現世田谷キャンパス)に移転し、高等部を開設(学長長瀬鳳輔)
1921	10	ワシントン会議ほか欧米視察へ出発(大正11年帰国)	国士館維持委員会が発足(会長栗野慎一郎)
1925	14		国士館中学校を設置(学長長瀬鳳輔)
1926	15	国士館中学校校長に就任(～昭和9年)	荏原郡西部6か町村合同経営の国士館商業学校を設置(校長大場信統)
1929	昭和 4		国士館専門学校を設置(校長水野錬太郎)
1930	5		国士館高等拓殖学校を設置(校長上塚司)
1932	7	国士館高等拓殖学校校長に就任(～昭和9年)	
1933	8		満州鏡泊湖畔に鏡泊学園を設置(総務山田悌一)
1938	13	日刊『大民新聞』創刊、社長に就任(主筆坂口二郎)	
1941	16	国士館専門学校校長に就任(～昭和20年) 国士館商業学校校長に就任(～昭和19年)	
1942	17	国士館高等拓殖学校校長に就任(～昭和20年)	国士館高等拓殖学校を設置
1944	19	国士館工業学校校長に就任(～昭和21年)	戦時措置により、商業学校を国士館工業学校に転換設置
1945	20	公職追放を受ける(昭和27年解除)	戦災で校舎を焼失(大講堂ほかを除く)
1946	21		法人・校名を至徳学園に改称
1947	22		至徳中学校(新制)を設置(校長鮎澤巖)
1948	23		至徳高等学校(新制)、至徳商業高等学校(新制)を設置(校長鮎澤巖)
1951	26		財団法人を学校法人至徳学園に変更
1952	27		国士館大学維持委員会が発足(会長小坂順造)
1953	28	至徳専門学校校長に就任(～昭和30年) 国士館短期大学学長に就任(～昭和48年) 学校法人国士館理事長に就任(～昭和48年)	学校法人国士館に改称 国士館短期大学を創設
1958	33	国士館大学学長に就任(～昭和48年)	国士館大学を創設し、体育学部を設置
1959	34	国士館高等学校・中学校校長に就任(～昭和48年)	
1961	36		国士館大学政経学部を設置
1963	38	学内会報にて、学園全体では「館長」、大学では「総長」の呼称と通達、総長に就任(～昭和48年)	国士館大学工学部(現理工学部)を設置
1965	40		小野路校地(現多摩キャンパス)取得 国士館大学政経学部二部、大学院(政治学研究科・経済学研究科)を設置
1966	41		国士館大学法学部、文学部を設置、鶴川校舎(現町田キャンパス)開設
1970	45	勲二等瑞宝章 叙勲	
1973	48	逝去(享年83歳)、正四位 叙位	柴田徳次郎学園葬を挙(葬儀委員長石井光次郎)
1977	52	世田谷校舎大講堂前に柴田徳次郎銅像を建立	

※資料表記を除き「国士館」に統一し、常用漢字を用いた。

この冊子は、企画展示「国士館創立者 柴田徳次郎 生誕120周年」に際して作成した。(会期：2010年11月1日～5日/会場：学校法人国士館世田谷キャンパス大講堂)

国士館創立者
柴田徳次郎
生誕120周年

教育者 柴田徳次郎の生涯

発行 2010年10月30日

学校法人 国士館 国士館史資料室

〒154-8515

東京都世田谷区世田谷4-28-1

電話 03 (3418) 2691 FAX 03 (3418) 2694

E-mail archives@kokushikan.ac.jp

印刷 株式会社 きょうせい

協力 株式会社フォトサービス